

贈り物の包装から見る、心の空間について

松本 拓磨

1. はじめに

贈り物は単に物であるだけでなく、人類学において検討されてきたように、それは贈り手と貰い手の関係を再生産・再規定するという機能を持つ（Godelier（1996/2000）他。）こうした観点は、興味深いテーマを含んでいる。贈り物を包んでいる包装をといて物そのものとしての贈り物の中身を目にしても、そこにはそのときに見えもしないし分からない贈り物の意味、謎は明らかにされないまま残り、贈り手と貰い手の関係の展開とともに事後的に捉えられるようになるということである。まるで贈り物の意味はずっと包装にくるまれているように。そして、その時間的な展開においては、物自体としての贈り物はすでに消費されていても二人の関係に影響を与え続けており、そのものとして贈り物が残っている必要はないのである。ここに、贈り物が物にとどまらない、心に深く関係している対象であることの一つの理由を見出すことができよう。贈り物には謎が包まれている心の空間と、謎が展開する心の時間があると考えられることもできる。本論は、具体物としての贈り物が持つ包装と中身という構造的な特性に着眼し、物としての贈り物と心としての贈り物についてさらに理解を深めることを目的としている。

まず、包装の歴史的な変遷を振り返り、人間にとって包装がどのように捉えられてきたかを概観し、その後、精神分析とくに Klein 派の対象という概念と合わせて検討することで、贈り物のもつ心の空間性と、その心の空間を認識する私たちの心の状態との関連を見ていく。その上で、私たちが贈り物を形成することと、贈り物をやり取りすることで生じる私たちの関係の変化が私たち自身に何をもたらすのか、論じることにする。

2. 日本における包装の歴史

縄と器

日本の歴史においてはそもそも縄文時代のはじめから、土器には縄のような模様がついており、縄と器は同じところにあらわされた。日本包装技術協会（1978）によれば、福井県にある鳥浜貝塚では実際にタコ糸のようなより糸の残遺物も見つかっており、約 5500 年前には縄は存在していた。また、同遺跡からは草の茎などを用いて編みである籠などの編み物が出土しており、縄（ひも）と器の関係は深い。上掲書によれば、縄は結束を意味する。そして、二つのものを縛ることと原初的な荷造り包装には深い関係があり、それは原始的な輸送運搬存在の可能性を示すことが指摘されている。縄文土器に縄の模様がついているのは、まるで器と縄の、

保存したり調理・変形したりすることと運ぶことの概念の結合を示しているようである。

日本において、いわゆる木板などの面で囲まれたハコが登場するのは、明確にはわかっていないが645年の大化の改新ごろまで待たなければならなかったようで、箱という字が竹かんむりで構成されているように、もともとは竹や柳といったやわらかい繊維を編んで作られたものに毛皮を張ったもの指していた。また、わらなどの細いひも状の植物で中身を包み、わらの両端をしばる藁苞^{わらづと}や上述した箱が用いられていた。これなども、縄と器の深い関係を示しているといえよう。

贈り物の包装 内容と容器

この苞^{つと}は、苞にくるんで物を運んでいたことから転じて、みやげ物や贈り物といった意味ももっており、贈り物は古くから包みと中身をもち、運ばれるものとしての性質をもっていたことが伺える。これは万葉集においても見られる関係で、「高安王、囊（つつ）める鮒を娘子に贈れる歌一首」とあるように、包むことと贈ることは日本人の心にとって深く関係付けられている。

また、同じく万葉集に「白玉を手にはまかなくに箱のみに置けりし人ぞ玉なげかする」という歌がある。ここには真珠を箱にいれて人に贈ったものの、手にまかずに箱にいれたままにしている様が描かれている。詠み手が贈り物の扱われ方と二人の関係を嘆くのではなく、贈り物そのものが嘆いている様子が詠われ、贈り物が心を持つ有様がいきいきと現れている。また、「伊勢の海の沖つ白波花にもがつつみて妹が家づとにせむ」とあるように、白波が花であれば妻に包んでお土産にできるのに、という贈り物自体が変形しても保存されるものを示している。ここでは、白波も花も、物としてのそれ自体ではなく、それらの語が並べられることによって表現される内容を包む言葉の連なりである。あるいは、この表現を換喩的なものとしてではなく隠喩的にみるなら、花が白波の包装であると考えてもいいだろう。ここに、具体物としての贈り物の包装と、花と白波という言葉によって包むことの二重性が表現されている。それは包みやすい一つの花であるかもしれないが、白波が詠み手に伝えたなにかを運ぶ花でもある。

武家社会が成立してくるころになると、鎌倉期のはじめには『満佐須計装束抄』という作法書が記され、中に包む文によって包み方をかえることが伝えられている（額田（1977））。さらに足利幕府が成立すると、贈答用の紙包みの礼法が定められる。金子の包み方が決まるようになったりして、中身と包装は一つのものの延長として表現されるようになってくるのである。そこでは、包みは中身を秘密にしてわからないものにするのではなく、中身が何であるか、包みを見たら分かるようになっていく。贈り手が貰い手にむける気持ちというのは、中身や言葉よりもむしろ具体的な包装に表されるようになる。

伊勢貞丈が1763年から記したとされ1840年に発行された『貞丈雑記』では、袋についてこんな話が述べられている。「人母の胎内にて胞衣^{えな}をかぶり、つつまれて袋に入りたるごとなる故、人の母をおふくろといえり。この説用いがたし。おふくろというは“おふところ”ということなり。母は懐妊の時、子はふところにある故なり。ふところを略して「ふころ」といい、ふころが転じて「ふくろ」になりたるなり。」ここでは包まれる袋のことではなく、むしろ母の体で子供がいる場所であるふところが「ふくろ」、言い換えれば中身によって器が既定され

る有様を述べている。有識故実研究者であった伊勢貞丈の観点からすれば、贈り物の中身が分かるように包装するのではなく、贈り物の中身が包装を決定しているということなのであろう。ここには運ぶものによって容器を変えるという非常に機能的な原理が表現されている。贈り物における内容と容器の見事な結合である。こうした表面への志向性は、その内容に裏付けられたものであり、内容の消失を意味していない。むしろ礼儀作法を通じて貰い手と贈り手の関係を表現する容器としての性質が系統立てて思考されるようになったということであろう。

容器と謎

とはいえ、上述した武家社会における礼儀作法を通じての関係という言葉は、はじめに示しておいた、時間的展開の中で贈り物によって再生産され再規定される関係とは少し異なる。というのも包装の礼儀作法に表される二人の関係に沿って、つまり既に明示されている二人の関係に沿って贈り手と貰い手が関係を続けていくことが意図されていることがその場でわかるのであり、それは事後的に意味が判明するというものではない。つまりこの場合、礼儀作法も一つの包装、容器として表に現れているものである。実際には、感謝や礼、あるいは上下関係や敵意のなさなど友好的な意味あいをもつ作法に則って將軍に献上されたものにすら毒見役がつけられる。作法で包まれているが、その実体はよくわからないからそうするのである。包装の仕方は作法を表すが、さらにその作法という容器は謎をつつんでいる。包装という表面への徹底した志向性は、こうした不可知の謎の空間を作ったのである。

こうした贈り物のもつ謎の空間は、古くから考えられてきたものである。日本では贈り物を受け取った時に、その贈り物が入っていた器を返す習慣があり、その中に半紙などの紙(移り紙・お移り)を入れる。これは現代では祝儀のお返しなどの具体物や金銭で行われることが多くなっているが、古くは「返り引出物とて紙一枚をぞ給はりける」と、鎌倉中期に著された『沙石抄』にもみられる風習である。額田(1977)は神道において古くから、紙は神と同一視されてきたとして、「紙はまだ折り目、包みしわをつけない以前から、すでに折り、包むべき一切の内容を兼ね備えているものである。この状態を称して古伝では「神つまり」といっている。」(p.139)と述べている。額田(1985)はまた、物を贈ることは本来神に食物を供える祭具から始まったもので、供え物には外からの穢れが移されないように気をつけねばならなかったことを指摘している。これらをあわせて考えてみると、贈り物の中身がなくなった空間に置かれるお移りとは神秘的で外から侵入のできない領域の印であることがわかる。空になった空間には、贈り物という具体物ではなく、そこからあらゆるものが顕れてくるような、紙という一つの印が残される。贈り物というある具体物によって決定された容器があり、そして、その容器によって包まれた具体物がなくなるとき、そこに謎が残される。このようにして包まれた謎は贈り手に返されるものであり、意味が定まらないからこそ、それらは時間経過の中で意味が展開していく空間となる。贈り物が交換される時、そこでは謎の交換が行われ、その謎に対して何らかの具体物が宛がわれるのである。

贈り物の空間と運ぶこと

こうして考えてみると、具体的な物としての贈り物の包装というのは一つの謎を運ぶ容器と

して抽象することができる。この抽象された贈り物のあり方を、筆者は心の贈り物として捉える。それは容器に内容を入れるのではなく、内容が容器を作り、そうして出来た贈り物は謎、事後的に意味が生成されてくる領域をはらむものになるということとして理解できるものである。

具体物としての包装は、縄に始まるような運搬のためのものを起源とすることは先に少し触れておいた。そして運ばれる中身とは、藁苞が土産の意味をもつようにその地域の特産品であり、その運び先は、その品がもてはやされる地域である。塩、作物、鉱石（武器）、酒、それらが豊富にある場所から、必要とされているがそれがない場所に運ばれる。川で甕をつかって水を汲み、家まで運ぶこともそうである。かつてあったものが足りなくなったりなくなったりして、そのものを別の場所に見出し、必要とされる所に運ぶ。これを考えると、贈り物は貰い手が完全な存在で贈り物を貰うにふさわしいということを指すのではなく、まずもって貰い手はどこか欠けた存在であることを示している。

具体物ではなく謎という空間の容器が贈り物の包装であるのなら、贈り物を運ぶ先というのも、ある包装の形成している空間として捉えることはできるのではないだろうか？塩の取れない場所に塩が贈られるのであれば、その場所とは塩という具体物がない地理的に包まれた領域と考えられないのだろうか？このように問いを立ててみると、そこから次のような視点が生まれる。贈り物は具体物のない領域を認識することから生まれる、という視点である。つまり、もとあった具体物が包装に包まれて心的な領域が成立してくるというよりも、そもそも境界に包まれた、抽象的な空間を認識することから、具体物としての贈り物が生じてくるという考え方である。

ここで私たちは、外にある具体的なものとしての贈り物を元に包装することについて考察を進めることが困難になってくる。そこには物、そして空間を認識するという非常に心的なプロセスが介在していることがわかるからである。そこで一旦贈り物の歴史的な検証を離れ、心理学、とくに深層心理学、精神分析における対象の認識の問題を検討することに入ろう。

3. 贈り物が生成されるプロセスの位置づけ

Freud における対象認識 対象を再発見すること

Freud (1925/2010) は、「主観的なものと客観的なものという対比は、最初から存在しているわけではない。それは思考が次のような能力を手にすることによって初めて作り出されるものなのである。すなわち、何かを知覚した後、対象それ自体はもう外部に存在していなくても、それを表象の中で再生産することによって再度ありありと思い浮かべるという能力である。現実吟味の最初の、つまり直近の目的は、表象されたものに対応する対象を現実の知覚の中に発見することではなく、それを再発見すること、すなわちそれがまだ存在していることを確認することなのである。…（中略）…しかし、現実吟味を開始するためには、かつて現実に充足をもたらしてくれた対象が失われていることが前提だということが分かっている。」(p.6、傍点は原文通り。)と記している。

ここで述べられている「対象それ自体はもう外部に存在していなくても、それを表象の中で

再生産することによって再度ありありと思い浮かべると言う能力」とは、筆者がこれまで贈り物が生成してくるプロセスとして論じてきたことに近い。むしろ、筆者がこれまで論じてきた贈り物は、このようにすでに内在化された表象をめぐる主観と客観を区別する現実検討能力を前提にしたものであると位置づけることが出来る。

Freud (ibid) はその少し前の部分で、こうした現実にはそのものが外界にあるかどうかという現実判断より以前の判断として、特性判断とでもいうような判断があることを述べている。「判断機能は本質的に二つの決定を下さなければならない。それは、ある事物がある特性を有するか否かを定めることと、ある表象について、それに対応するものが現実存在するか否かを定めることである。決定の対象となる特性は、元々は良いか悪いか、有益か有害かということだったのだろう。」(pp.4-5) この特性判断に従って、外部にあるものを内部に取り入れるかどうか決定され、「悪いもの、自我の知らないもの、外にあるものは、自我にとっては差し当たり同じものなのである。」(p.5) 悪いものと外にあるものは同じであり、ここでは外にあるかどうかという現実判断は、良いか悪いかという判断に依存しているモデルが提示されている。

このアイデアは Abraham (1924) の影響が大きいと考えられる。Abraham は Freud の協力のもと、1910 年ごろから躁うつ病患者に対して比較的病状が安定している状態での精神分析治療を試み始め、外的な人物の死や別離などの喪失体験が、内的な対象として心の中に取り入れられるプロセスを検討するようになった。躁うつ病者の妄想などで問題となる現実認識の独特なあり方は、Freud が述べたような「表象されたものに対応する対象を現実の知覚の中に」「再発見」することの障害というより（これは Freud が抑圧という形で神経症の病理を記述したものといえる）も、むしろ表象として取り入れる、良いか悪いかの特性判断の段階における障害として理解することができるようになったのだった。

Klein の対象認識 荒れ狂う情緒の世界

こうした良いものを取り入れること（摂取 introjection）と悪いものを吐き出すこと（投影・投射 projection¹⁾）をめぐる問題は、Abraham の分析を受けた Klein によって、子供の遊戯分析を通じてさらに展開されることになった。外にあるものが良いか悪いかという特性判断を、自分の内から生じてくるものにも適用できること²⁾、そしてその内から生じる悪いものと判断されるものを自分の外に投影する空想を持つことを Klein (1946) は述べている。「憎悪をもって追放されたこれらの有害な排泄物と共に、自我の分裂排除 (split-off) された部分もまた、母親の上に投影されるというよりはむしろ、母親のなかに投影されるというべきであろう。これらの排泄物と自己の悪い部分は、対象を傷つけるばかりか、対象を支配し対象を手に入れることにもなる。母親が自己の悪い部分を含み持つ限り、母親は分離した個体として感じられず、むしろその悪い自己として感じ取られる。」(p.12 傍点は原文通り。)

こうした形で自己が対象と同一化する過程を Klein (1946) は投影同一化³⁾と呼んだ。この投影同一化の世界では、良いものと悪いものが入り混じった混乱を引き起こす。つまり良いものと感じられていた乳房でも、一度自己の内に欲求不満が高まれば、それはすぐに自己の中にある欲求不満を感じている不快で悪い部分を投影された悪い対象に変わってしまう。そこには

迫害感や被害感、恐怖といった情緒の嵐がふきあれており、「否認され絶滅されるのは、一つの状況や一つの対象だけではない。この運命をこうむるのは、まさに一つの対象関係である。それゆえ対象へ向かう感情を生み出すような自我の一部も、同じように否認され絶滅されてしまう。」

こうして Freud のいう現実判断にいたることが出来ず、知覚された対象との関係が破壊されてしまい、対象が現実判断のもととなる表象として内在化されない深刻な状況がここには描かれている。欲求不満をもたらす乳房の不在は迫害してくる悪い対象があることとして幻覚される。つまり、ここではないことは認識されず、ただ悪いものがあるという世界が展開する。

こうしてみると、投影同一化の優勢な状態では具体物がないことは認識されずその代わりに幻覚された悪い対象であふれていて、それ故に筆者が述べてきたような贈り物は生まれようがないことがわかる。なぜならそこでは悪いものであれ、幻覚によってあるとされたものであふれており、何も不足していると考えられていない故に、迫害してくる悪い対象の幻覚に怒りをもって応酬することはあっても、ないものを求めることは生じないと考えられるからである。仮に贈り物を運び入れようものなら、たちまち悪いもので満たされたもの^{おびや}に変わってしまうだろう。包装でくるまれた謎は、そこでは迫害し、脅かすものでしかない。そうした贈り物のお返しは、報復である。ここに、謎が包装されているという贈り物の心理的な特性は、その送り手と貰い手の心の状態によってまったく違うものとして現れてくることを私たちは見出す。

では一体このような情緒の嵐の中で、どうやって人は包装にくるまれた空間のやりとり、交換ができるというのだろうか。できないのであれば、そこに必要なものがないという事実^{おびや}に気付くことができず、悪いものを幻覚し続ける中で、本当に必要なものを現実^{おびや}に認識されることは先延ばしにされてしまうかもしれない。あるいはそのまま深刻な欠乏状態が続き、心の死を招くこともあるかもしれない。誰かがその現実^{おびや}に気づかなければならない。そして、その気づかれた現実^{おびや}はどのように貰い手に受け取られるよう包まれ贈られるべきなのかというのは、原初的な心の次元での交流を考えた場合、臨床上の問題としても存在している。

この問いについて、Bion による原初的コミュニケーションとしての投影同一化と、*alpha function* という概念をもとに検討する。それらはそれぞれ、自己の投影をいったん引き受けて自己に代わって心の空間を認識する現実の対象の必要性和、その現実の対象に必要とされる心の機能について示すものである。心の空間を認識する時に贈り手だけでなく貰い手に何が一体起こっているのかを論じながら、贈り物を具体物であるだけでなく心でもあるものとして扱うために必要なことについてみていってみよう。

Bion による投影同一化の解釈

投影同一化に、原初的コミュニケーションとしての機能を見出したのが Bion である。Bion (1962/1999) によれば、この投影同一化は自己の空想の中で自己と対象が同一化するだけでなく、空想の外にある対象に何らかの影響を与える。「患者はたとえ生まれたばかりでも、自分が持ちたくない感情や母親に持ってほしいと思う感情を母親に発生させるよう十分に振舞える、現実との接触を持っている」(p.43)。

つまり、自己の内に欲求不満が高まりその欲求不満を悪いものとして自己の内から排泄し、

まるで対象が自己を迫害しているかのように自己が空想しているまさにその時に、現実の対象（ここでは例えば母親）は乳児に実際に何かが欠乏し、苦しんでいると感じ取ることができることがある。この時、自己は空想の中で果てしない迫害の循環を生きており、そこでは対象との関係は破壊されているように感じて泣き喚いている。しかし現実には存在している母親は、泣き止まない赤ん坊をしっかりとつけるという行動で排泄したくなるような、自分の中にある耐え難い情動について気づくことができるかもしれない。ここにはまだ明確な言葉として形にはならないが、何かが伝えられていて、耐え難い情動に気づいている母親は未だにはっきりとした形にならない乳児の苦しみに触れている。こうした形で、乳児による投影同一化の空想は母親という対象を通じて現実には自分が欲しているものを手に入れることができることがある。あるいは原初的な心の世界では、投影同一化を通して交流することで初めて自分の欲しているものを知ることが出来る。

Klein においては、投影同一化の世界は、悪い対象を破壊し続ける中で、自分が悪い対象だと思っていたものの中に良いものも含まれていたという気づきを経て、償いの感情をもたらし、そこには抑うつ（抑うつ態勢）の情緒が伴われる（抑うつ態勢）。そこでは相手を全て自分がコントロールしているという万能的な幻覚・空想は放棄され、良いものがなくなってしまう、という現実の発見がなされる。これは、Freud が述べていたような、「現実吟味を開始するためには、かつて現実には充足をもたらしてくれた対象が失われていることが前提だということが分かっている」ことの情緒的側面をとりあげた理論的展開である。Bion は、こうした一見自己の空想の内部で展開する現象ととらえられる対象喪失の発見へのプロセスに、現実の治療者が関わることの重要性を理論化した（松本（2002））。これは、贈り物という謎に包まれた空間というものを形成する上で、現実の対象からの働きかけの重要性について示唆していると考えられる。

具体的な行為の水準での交換において、一体相手が何を伝えようとしているか、それを考える心の空間があって初めて、そこには心のやりとりという水準での交換が生じる。つまり、投影同一化が優勢な心の状態にある人から贈り物がなされるときに、具体物があることとは別のないことについて考えるスペースが貰い手には必要とされることが伺われるのである。そこでは、貰い手が贈り物を喜ぶだけでなく、むしろ何かがもうないという抑うつ（抑うつ）の情緒を感じ取ることに伴うのではないかと考えられるのである。

Bion（1959/2007）はこのようなないことを認識することが、何かが一定の法則によって連結（結合する）ことと不可分であることを見出した。そのことを、 α function という彼の概念とともに検討していってみよう。それは、貰い手が具体的な物が無い領域について認識する必要性をさらに強調するものである。

α function

Bion（1962）は知覚された刺激が空想を通じて自分の中になく排せられるのではなく、表象として内在化されるプロセスを可能にする心の働きを α function⁴⁾ と呼んだ。ある感覚刺激が α function によって、 α 要素に変換され、 α 要素からなる集合が形成される。任意の x を代入した結果計算される α は、 $f(x)$ という共通の集合である。このようにして無関係であるかのような刺激はある集合の要素として関連付けられ（結合され）る。いわば $f(x)$ と

いう器にまとめられた α になるということである。そしてその器は一つ一つの α によって形成されている。このことは、包まれるものによって包むものが形成されることを指している。先ほど伊勢貞丈の文章にみられた、胎児がいる所がふところである故に、ふくろという言葉が母親を指すという論理と、洋の東西を問わない一致がみられる。

だが先ほど述べたように、投影同一化が優勢な心の状態では、各々の刺激は互いに連結せずばらばらのものになってしまう（Bion (1959)）対象関係は破壊され、互いに連結することに適したものとして取り入れられることがない。そこでは α function はうまく働いていないのである。

Bion は、乳児の欲求不満状態は、母親からの働きかけによって飢餓感や排便後の不快感、死にそうな恐怖など、相互にコミュニケーションできる概念として形成される必要があることを論じた。これは、乳児の中で自動的に働く過程ではなく、母親が乳児の代わりに考えて実際に授乳やおむつがえ、だっこしながらの言葉かけなどによって初めて可能となる、自己と現実の対象の間における相互交流を前提とした過程である。それは自己の中で自動的に内容が包装を形成するのを待つのではなく、ばらばらで無関係の刺激であるために自己を苦しめる無意味なものを、意味のあるまとまりとして変形し、関係付けてくれる現実の対象を必要とする。そういった意味で、 α function はまず、現実の対象が担うものである。乳児からの呼びかけに母親は自在に答える。そこで意味のわからない刺激は α 要素になり、元の具体物であることをやめ、考えられるものに変形されるようになるのである。

こうしてみると、贈り物に必要な内容と容器の関係は、その成立の段階から贈り手と貰い手の間における緊密な相互作用からできていると考えることができる。贈り物は贈り手が相手にないものを認識することから生まれるだけでなく、自己の中で意味のないばらばらなものと感じられる何かに、現実の対象が意味を与えて理解できるものに変形することから生じてくるものでもある。まるで、母親の手を借りてできた粘土のおもちゃを興奮とともに母親にみせてるように。そうして包まれたものを相手にあげたくなること、それが贈り物を贈ろうとする動機であるというのは一般的に理解されることでもあるだろう。このとき、ない領域を認識するのは自己ではなく、まず現実の対象である。具体的なものが包まれることで、それは単に物であることをやめる。そして、それは α function をにう現実の貰い手によって、今贈り手と貰い手が満ち足りた関係ではないという状況のなかで、贈り手に何かがないことを物想う（Bion (1962)）空間があって成立するものである。それは常に物ではないものについて考え続けることを要求し続けるという、非常に厳しい状況の1つである。

このように考えてみると、貰い手が贈り手の中にない領域を認識しその状況に持ちこたえることが、贈り手が貰い手に対して何かない領域を認識することに先行するということがわかる。だがそれはないからといって悲嘆にくれてしまえばいいものでもない。なぜなら、元のものは変形していても、違った形で存在し続け、贈り手と貰い手の関係をふたたび結び付けているはずだからである。そうでなければ贈り物によって私たちは新しい関係を続けていくという実際の現象が理解できない。そこで、不変物という形で私たちになお考えることを要求してくるもの、それを最後に考えてみることにしよう。

4. 贈り物の空間と不変物

あったものがもうないこと

α function を想定した場合、 α 要素は感覚刺激 x を α function によって変形される際に生成される集合の要素と考えられる。それは、感覚刺激と α function が番うことによって生まれるものと見なしてよい。 α 要素があると考えられる時、変形された x は元の感覚刺激ではなく、 α 要素からなる一つの集合を形成し、互いに関係付けられ思考することに適したものに変わっている。つまり、この時、元あったものはなくなっている。 α 要素が生成されるためには、もとあったものがもうないことを認識する過程を必要とする。関係付けられるには、もとあったものがなくなっていなくてはならない。もちろん、これは感覚刺激と α 要素が全く連続性を欠いたものであることを示しているわけではない。Bion (1965/2002) は、「変形の変わらない側面を構成するようになる諸要素を、私は不変物 (invariants) と呼ぶことにする。」と述べ、目の前のヒナゲシの広がった野原をキャンバスに描かれた絵に変形するにもかかわらず、元のヒナゲシの野原を知らない人にヒナゲシの野原の印象を伝えることができることを例に挙げている。具体的に目の前にある野原それ自体はないところで、その思考・経験は続いていく。それは具体物ではなく、抽象された不変物である。運ぶには、それが適している。

Klein の荒れ狂う情緒の世界の探求を引き継いだ Bion は、思考が始まる過程に存在する、かつてあったものがもはやないということの認識が自己に甚大な情緒的衝撃を与えることを、通常の言語の用い方で思考することができない精神病患者との精神分析から考えざるを得なかった。原初的母子関係、つまり乳房と乳児の関係をモデルとする Klein 派では、目の前にあった乳房がないことに乳児がどのように対応するかで様々に異なる反応を示すとされる。一つはないという認識ができず、乳房がないという事実ではなく、欲求不満を強める悪い乳房があるという幻覚に置き換えること。もう一つは、ないという認識を破壊するために、変形されたものから意味を剥ぎ取り (α function の逆転)、自分に対してウソをつくこと。それらとは別の方法として、目の前にあった乳房がもうないという欲求不満に耐え、事実を認めることである。「ここでの正の進展、つまりいるべき乳房がいない、「不在の乳房」、「よい対象は不在である」という観念は、母親の授乳の好ましい形での反復があり、赤ん坊が乳房がないという欲求不満にもちこたえて初めて生まれるのです。そして不在の認識によって初めて、その不在となり対象が占めていない区域に、こころの空間が存在するようになるのです。」(松本 (2009) p.40. 太文字は原文通り。)

このように、 α function によって α 要素が形成される際に、「あったものがもうない」ことを認識することと「こころの空間」が成立することは連続した現象であると捉えられる。 α 要素によって形成される集合には、必然的にないことが含みこまれている。空間が発生し、その空間が保持されるような境界によって空間が包まれるとき、そこには「もうない」ことが同時に包まれている。そうやって目の前にもうない乳房が包まれてはじめて私たちは、なくなった乳房について考えることができる。「どうしておっぱいはなくなっちゃったんだろう？」この問いは、おっぱいがなくなり欲求不満を引き起こすことに加えて、人の心に大きな衝撃を与えることにつながる。なぜならこの問いは Klein によれば、「自分がおっぱいを壊してしまった

んだ。」という罪責感を引き起こすからである。そしてこの罪責感自体に持ちこたえられず、再び「悪い自分を責めてくる」という迫害的な対象を幻覚し始めることもある。あるいは、「なぜ？」という問いを封印し破壊するために、考えることをやめることもあるだろう。

関係の不変物

このことを贈り物について考えてみることにしよう。確かに贈り物に包まれるものは、具体的なあるものである。だが、贈り物になるとき、その具体物には包装がなされる。そこでその具体物は、包装に包まれた中身になる。その時、私たちは「この包装の中身はどうなっているんだろう？」と問いをもつ。包装と結びついて贈り物になった具体物は、もはやそれ自体ではなくなり、謎、心の空間、そこに何が入っているのか考え始める契機を含みこんだものに変化する。もし見えない物のもたらす衝撃があまりに大きすぎて、贈り手と貰い手の関係が抜き差しならない状態であるなら、貰い手はそこに悪意や迫害してくる対象を幻覚する。そこに含まれているのはあるものである。「この包装の中身は、爆弾だ。」それは受け取るか受け取らないかの二択にしかならない。この場合は受け取られることはまずない。しかし、もし見えないことを考えることができるなら、それがただの物でないことを考え始め、贈り手の心のわからない部分について物想いを始めるだろう。この時、贈り物に含まれるのは、単に物ではなくなり、贈り手の心の謎である。つまり、贈り物に包まれているものが「ある」ものか「ない」ものか、それは互いの関係と、それに応じた心の状態によって決定される。

先ほどの α function の変形による $\dot{\alpha}$ ことの認識とは、もともとあるものが、一つの集合の要素としてお互いに関係付けられることの中に位置づけられた。包まれることで謎と具体物が番い、それは元の具体物としての物ではなくなる。と同時に、そこには変形しても残る不変物があるはずである。これこそ、私たちが贈り物の意味として探求するものである。

そして、私たちは贈り物のやりとりがなされた時、相手の心の謎を問うだけでない。「一体どうしてこの人は贈り物を私にくれるというのだろうか？ 私たちの間に何が起きているのだろうか？」贈り物はそれ自体が内容と包装が番ったものであると同時に、贈り手と貰い手を「贈り物をやりとりする関係」として一つの集合の要素として変形する。贈り物に包まれているのは相手の心の謎であると同時に、以前の二人の関係が変形されてもうないという事実の認識がある。その関係の不変物が何か、私たちは問うのである。贈り手と貰い手の間で今までと変わってしまったこと、これからも変わらないこと。そして先の論文で筆者が示した互いの関係の展開によって贈り物の意味が規定されるという見解は、この不変物が、時間の経過、関係の展開の中で変形したものを通じて定まってくることと考えることができる。それらはなくなってしまうものから事後的に再構成されていく。

一方、いままであったものがもうないという事実の認識がもたらす衝撃は、人としての私たちの心の深い部分に甚大な影響を与えることをこれまで見てきた。それは、贈り手と貰い手双方を激しく情緒的に揺さぶる。そして贈り物を目の前にして、そこに何かがあることがもうないこと、関係が変わったことを認識する情緒的な衝撃は投影同一化を行う自己ではなく、心の空間を持つとする現実の対象にまず訪れる。そしてそれは、貰い手がその抑うつ情緒に持ちこたえられずに、悪意を含む具体物としてしか感じられなかったり、過剰な喜びという躁的なあり方に

よって防衛したり、何かしらウソを持ち込むことで贈り物の意味を破壊することを含む。これこそ、贈り物を心のものとして考えることを妨げる難しい問題である。

このことは臨床的には、贈り物がセラピストに贈られたとき、その贈り物を通じてセラピストをクライアントの空想の登場人物として位置づけようとするクライアントの投影同一化に持ちこたえながら、その「情緒の嵐」(Bion (1979/1998))の中で考え続け、そうした形でコミュニケーションを求めているクライアントの部分について解釈を返していくこととして位置づけられる。この点に関しては場を改めて、事例研究という形で、クライアントとセラピスト双方の心の状態に焦点をあてて詳細に論じる必要があるだろう。

歴史の検討のところ、筆者は包装と縄が原初的に深い関係にあることについて述べておいた。これは、何かが結びつくこととそれらが包まれることの関係として考えることもできる。このことは、私たちの心が任意の具体物を α 要素に変形し、縄で結び付けられるように互いに関係付けられていることこそ包まれていることを意味するという本論での心の理解と、贈り物の原初的性質の近親性を示しているといえよう。

このことは贈り物だけに留まらず、私たちが誰かと関係しているとき、私はもとあった私ではなく常に自分を失いながら、変化し続けていることを示している。なぜなら、誰かと私が結びついている時、私や誰かはもはやもとあったそのものとしての具体物ではなく、関係という集合の中にある要素に変形しているからである。もはや私たちは関係の中でしか己を問うことはできない。それは、関係の展開の中で顕れてくる不変物、失いながらも連続している私である。かつての自分ではなくなったからと言って、私たちは決して別人にはならない。それ故に私たちは過去、今、未来、切り離せない時間を生きていることを認識しなければならなくなる。もしそういう事実を認めないのならば、何も失っていない、自分は何も変わらない完全な人間であり、時間などというものが無い世界に生きていると幻覚をするしかない。それは、私たちが互いに関係しているという事実を考えることを破壊することである。

まとめ

贈り物は具体物が包まれたものであるだけでなく、包まれることによってその具体物は心の空間を含みこんだものに変形される。そして、それはただ心の空間を包んだものであるだけでなく、相手に贈られることによって贈り手と貰い手を関係付け、そこから意味が派生してくるような関係の空間、そしてそれに伴って関係の時間を形成するものである。こうした空間・時間認識には、「かつてあったことがもうない」という情緒的に揺さぶられる現実認識が必要と考えられ、そうした意味で贈り物のやり取り、心の空間のやり取りとは、Freudの言う「特性判断」を持ちこたえた「現実判断」の機能を必要としている。贈り物は、物そのものでなく心の空間を包んだものとして捉えることを私たちに要求している。そして私たちは他者との関係の中で変形されるもの、不変物として保存されているものについて思いをめぐらせ、考え続ける必要があるのである。

注

- 1) Projection の訳語には投影・投射という訳語がある。松木 (2010) は、投射という具体物の排出・排泄のニュアンスを伝える訳語については、Bion をはじめとする Klein の後継者によって更に探求された、精神病患者における全く具体化してしまっている Projection について妥当な訳語であることを論じ、Klein による Projection については投影と訳すことを提案している。本論ではその論に準じている。
- 2) Freud は自我に取り込まれるかどうかを問題にしており、『心的生起の二原理に関する定式』にあるように知覚される刺激は外的なものか内的なものかは区別していない。むしろ性欲動といった内的な刺激を彼は非常に重視している点で、内的な刺激に関する知覚とその対処は精神分析開始当初から大きな問題であった。Klein は、心の中にも外界における対象と同様に内的対象がいるとして、心の中にある外部の領域を積極的に捉えた。
- 3) Projective Identification の訳語に関する議論についても、松木 (同上) を参照のこと。投影という訳語自体は、対象と自己の間に距離が存在するが、同一化という言葉においては空想の中で自己と対象が一体になっている事態をさす。また、同一視ではなく同一化という言葉によって、後に論じるように、対象と自己の結合部分が生じることで現実に対象とコミュニケーションするという機能を内包している。
- 4) α function は通常「アルファ機能」と訳されるが、ここでは関数という数学的な意味合いを持つことを保持するために、そのまま function としている。

参考文献

- Bion, W. R. (1959/2007): Attacks on Linking. (邦題: 連結することへの攻撃 中川慎一郎訳) 『再考: 精神病の精神分析論』、金剛出版
- Bion, W. R. (1962/1999): Learning from Experience (邦題: 経験から学ぶこと 福本修訳) 『精神分析の方法 I』、法政大学出版局。
- Bion, W. R. (1965/2002): Transformation (邦題: 変形 福本修 / 平井正三訳) 『精神分析の方法 II』、法政大学出版局。
- Bion, W. R. (1979/1998): Making the best of a Bad Job (邦題: 思わしくない仕事に最善を尽くすこと 祖父江典人訳) 『ビオンとの対話—そして最後の四つの論文』、金剛出版。
- Freud, S. (1925/2010): Die Verneinung (邦題: 否定 石田雄一訳) 『フロイト全集 19』、岩波書店。
- Godelier, M. (1996/2000): 『The Enigma of The Gift』 (邦題: 贈与の謎、山内昶訳) 法政大学出版局。
- Klein, M. (1946/1985): Notes on Some Schizoid Mechanism (邦題: 分裂的機制についての覚書) 『メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界』、誠信書房。
- 松木邦裕 (2002): 『分析臨床での発見 転移・解釈・罪悪感』、岩崎学術出版社。
- 松木邦裕 (2009): 『精神分析体験: ビオンの宇宙 対象関係論を学ぶ 立志編』、岩崎学術出版社。
- 松木邦裕 (2010): 『分析実践の進展 精神分析臨床論考集』、創元社。
- 額田巖 (1985): 『包みの文化』 今に生きる技と発想、東洋経済新報社
- 額田巖 (1977): 『包み』 法政大学出版局
- 日本包装技術協会 (1978): 『包装の歴史』 日刊工業新聞社

(臨床心理実践学講座 博士後期課程 3 回生)
(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Understanding Space of Mind through an Analysis of Package of Gift

MATSUMOTO Takuma

This paper analyzes package of gift in order to discuss the space of mind that allows people to be able to think enigma. In Japan, there is a close relationship between the package and the rope. This fact psychologically represents the relationship between container and bond. From a psychoanalytical perspective, when we process the space of mind, we must realize that there has never been a breast. Concrete objects then lose their substances and get transformed into abstract concepts. Despite transformation, something invariant does exist. They are linked with each other and form a class. They are contained in the same space of mind. Similarly, once a concrete object is packaged, it becomes a gift that creates a bond between the giver and receiver. They form a class, and then each of them lose their narcissistic identities and are transformed into an existence determined by the relationship formed by the gift. They then begin to question what is invariant both in themselves and their relationship. Simultaneously, a space of mind is produced not only in the container but also in the existing relationship between the giver and receiver.